



千葉動力車

ついに勝利!

幕張電車区 有機溶剤問題

三カ月半にわたる幕張電車区での有機溶剤作業をめぐる闘いは、大きな勝利をかちとつた。八月八日、ついに千葉支社は、動労千葉が要求してきたとおり、交検庫の塗装作業について、専門の業者によって、交換作業のない土曜・日曜に行なうことを正式に明らかにしたのである。

現場からの告発、ひらき直る現場責任者に対する幕張支部の追及行動、毎夜遅くまで続いた支社に対する幾度にもわたる抗議の団交、働く者の生命にかかわる違法作業をやらせておきながら、責任逃れに終始する千葉支社に対する怒りのスト通知のような支社本部をあげた闘いがついに、千葉支社―幕張電車区当局を追いつめたのだ。

この勝利を全体で確認しよう。しかし、残された課題がまだひとつある。この危険作業を強制した現場の責任者、幕張電車区長、首席が未だ一言の謝罪もしていないことだ。電車区当局の謝罪、完全勝利をかちとろう!

大きな勝利だ!

そもそも、有機溶剤問題は、現在のJRの実態を象徴するような事件であった。

JR総連・革マルと結託し、組合潰ししか考えない、あまりに異様な経営姿勢を十年にも及んで続けたため、最も大切なはずの、安全や労働者の生命のことなど、頭の片隅からも消しとんでしまっている。労働安全衛生法のような、ごく基本的な法的知識すら全く持ち合わせない者が管理者となって労務政策だ

けをやっている。現場から深刻な声があがっても、動労千葉や国労の組合員からの声は、「文句を言うな」としか受けとめない。今回の有機溶剤作業でも、「気持ちが悪い」「腕がしびれる」等の声があがったときにも、「何か問題があるかも知れない」と考えることすらなく、逆に「作業が遅れている」と危険作業をけしかけたのだ。

このような異常な経営姿勢が積み重なった結果が今回の有機溶剤問題であった。たんに、あまりにズサンであったというレベルの問題ではない。だからこそ、この闘いの勝利は、JR体制そのものを追いつめるような大きな意味をもっている。

スト通知が当局を追いつめる!

四月の申し入れ以降、千葉支社は、「申し訳ありません。塗料が有機溶剤であるとしたら問題がでてきます」と言って、あわてふためいて、翌日から作業を中断した。ところが、それ以降の千葉支社の対応は、何とかこの問題を握り潰そうとする責任逃れだけであった。冗談じやない!。ここから、支部―本部をあげた闘いが始まった。われわれの闘いを発端として、国労も起ちあがり、動労千葉は五月にはスト通知を行なった。

そしてついに、六月二十八日の団交の回答書で「安全衛生上十分な点があったことは遺憾であった」との回答をしたのである。この十年、明らかな間違いでも、それを絶対に認めようと

しなかったJR千葉支社に遺憾の意を表明させたのだ。

現場の謝罪を!

しかし、それでもなお、現場当局はひらき直りを続けた。安全衛生委員会の場で、労働側委員が、審議事項として有機溶剤問題を提起したことにすら、「この場合は現協ではない」などと、称して審議することすら拒否する。八月九日、朝の点呼において

千葉転の闘いも 大きく前進!

動労千葉は、千葉転でも、不当な要員操配をめぐって、七月二〇日より、「時間外及び休日労働拒否」の争議通知を行い、闘いに突入した。既報のとおり、千葉支社は、八月一日、習志野電車区から二名を千葉転に異動した。われわれの闘いが、「九月まで要員操配は行なわれない」と頑なに言い続けてきた当局を突き動かしたのである。また当局は、千葉転が担当する予定であった臨時行路を、こっそりと京葉運輸区に持ちかえる等の対応を行なわざるをえなくなっている。闘いは確実に当局を追い

国労も共に決起
われわれの闘いに国労の仲間たちも起ちあがった。分会は、非番者集会を開催し、「休日労働は一切拒否する」との方針を決定したのである。

一方、「平等な要員操配をしろ」という当然の要求に敵対して、休日労働に応じたのはJR東労組だ。自ら虫けらになる者は後で踏みつけられても文句は言えない。まさに、「汝の権利を踏みじった者をして、処罰を免れて恬然たらしむることなかれ」である。恒常的なスト体制が当局を追いつめている。さらに闘いを強化しよう!

